

女子大学生の協同課題場面における三者間コミュニケーションの検討

礪波 朋子

1. はじめに

日常生活において、人は様々な形態でコミュニケーションを行っている。友達や同僚と雑談することもある。勉強や仕事等作業をしながら話をする場合もある。また、コミュニケーションを行う相手は、1人であるとは限らず、2人以上の複数の人を相手に話すことも少なくない。

近年、子ども達の間関係力が低下しているという問題が指摘されている。子どもの付き合いが、「2人1組」を中心とした少数化と均質化が進んでおり、特に女子は少人数で固まる傾向があり、女の子の友だち関係が危うい（西本, 2004）という指摘もある。子ども達の間関係力を高めるためには、三者以上の関係をうまく形成していくことが重要だと考えられる。幼児の場合、子ども同士で会話のみを行うことは少なく、むしろ何らかの活動を共にしながら会話することが多い。そこで、礪波（2007）は、子ども同士が三者間コミュニケーションをうまく成立させ維持させる要因について検討するため、幼児が3人組で一緒に粘土遊びをする場面を設定し、発話、視線行動、笑い、模倣の頻度について分析を行った。その結果、子ども達の三者コミュニケーションの成立には、発話時に相互に視線を向け合うことや、笑いの頻度、発話・動作の模倣が重要な役割を果たしていることが示された。

本研究では、さらにコミュニケーション能力が発達していると考えられる女子大学生を対象に、初対面ではなくすでに対人関係が確立している友達同士での三者間コミュニケーションについて検討することにより、どのような発話や行為が、よりスムーズな三者間コミュニケーションを築く上で重要であるかについて検討することを目的とする。

まず従来行われてきた三者間コミュニケーションに関する研究を、二者間コミュニケーションとの比較、三者関係のバランスの問題、円滑なコミュニケーションの指標、会話場面と共同行為場面との比較、の4つの視点から概観する。その後、女子大学生友達同士3

人組で協同課題を遂行する実験場面について分析し、円滑な三者間コミュニケーションを成立し維持するために重要な要因について探索的に検討していく。

2. 三者間コミュニケーションの特徴

2-1. 二者間コミュニケーションとの相違

従来行われてきた対人コミュニケーションの研究の多くは二者間の会話場面のコミュニケーションを分析対象としており、三者以上のコミュニケーションに関する検討はまだ十分には行われていない。

二者関係と三者関係の違いは、量的な違いのみではなく、関係の質的違いが生じるとされている。社会一個人モデルであるソシオン理論（藤澤, 1997）の中でも、三者関係は二者関係とは比較にならないほど複雑な様相を呈し、集団特有のダイナミズムを作り出すことが示されている。

大坊（2004）は、二者関係と三者以上の関係とではその力動性が大きく異なると指摘している。二者関係では、双方向のコミュニケーション回路のみであり、一方の送信ないし受信がなければ成立しない。一方で、三者関係では二者の関係が3通り存在し、いずれかの二者間のコミュニケーションは、当該でない者にとっては、当事者でないからとて偶然の傍観者なのではなく、そのコミュニケーション行動から間接的な影響を受け、かつ、その二者間のコミュニケーション行動にも場を共有する者としての影響を及ぼす（大坊, 2004）。さらに、大坊（2004）は、一対一のメッセージ発信のみでなく、自分以外の二者に向けてのメッセージ発信、どちらかを特定しないでの発信もあり、三者関係は二者関係と比べて分析点と視点が著しく増加することも併せて指摘している。

2-2. 三者関係のバランス

三者間のコミュニケーションに関する研究は情報処理分野でも活発に行われている。

小野・坂本・小川・駒込（2008）は、バランス理論

を用いたロボットを交えた三者間の対話実験を行い、対話時の身体動作の計測を行うとともに実験後のロボットや他の被験者に対する印象評価を各被験者に求めた。ロボットが対話者Aの発言に対して賛成する意見を述べたり、好意的な身体動作をするようなシステムを設定することで、対話者Aのロボットに対する印象が良くなるように操作し、一方で、ロボットが対話者Bの発言に対して否定的な意見を述べたり、非好意的な身体動作をするように設定し、対話者Bのロボットに対する印象が悪くなるように操作した。その結果、被験者同士が直接的にはインタラクションを行わなくても、ロボットが個々に二人の被験者とインタラクションを行うことで、被験者同士の関係を壊すことが可能であることが示された。この結果から、人間は身体的インタラクションと発話内容から他者同士の関係を推定することができ、その能力がバランス理論のような社会的ダイナミクスをうみだしているともいえることが小野他(2008)により指摘されている。

このように、三者関係では1人がロボットの場合でさえ、二者同士の関係性が他の二者関係に影響を与え、複雑な関係を作り出すことが示されたといえる。

また、徳永・湯浅・武川(2006)は、複数人が参与する会話における発話交替の仕組みを明らかにするために、3人会話場面における発話交替・継続時の視線行動について分析を行っている。徳永他(2006)は聞き手の視線行動には発話したい／発話したくないという意図があり、話者になりたい聞き手は話者をより多く見て発話を要求(自己推薦)する、次話者になりたくない聞き手は話者からの視線を回避し、もう一人の聞き手を見て発話を促す(他者推薦)といった戦略があるようだとして解釈している。また、円滑に会話が進むのは話者からの視線移譲だけでなく、聞き手側の戦略というべき発話・非発話の意図を参加者が互いに認知することが関わっていると指摘している。

三者間では、それぞれ参加者の発話・非発話や視線は、向けられた相手のみでなく、他の参加者との関係により果たされる役割が異なることが示されたといえる。

以上の研究より、三者間のコミュニケーションには、複数の二者関係が存在するという以上に複雑でダイナミックな過程が含まれており、バランスよく成立させることは難しい課題であることが示されている。

2-3. 円滑な三者間コミュニケーションの特徴

三者間コミュニケーションを円滑に成立させるために重要な要因とはどのようなものであろうか。

村山・清水・大坊(2006)は、3人集団における会話満足度に影響を及ぼす要因について検討している。その結果、非言語表出性の高い個人ほど会話満足度が高くなることが明らかになった。また、集団内でうなずきの量が多いほど会話満足度が高くなる一方で、討論条件においては集団内での笑顔の量が多いほど満足度が低くなることが示された。親密条件より討論条件において会話満足度が低く、会話の内容によっても会話満足度が高くなる要因が変わってくるということが明らかにされた。

前田・高嶋・梶村・山口・北村・岸野・前田・大坊・林(2010)は、会話への参加者が感じる場の盛り上がりと定義する「場の活性度」を自動的に推測する手法の確立をめざし、3人会話中の発話量、手の動き、頭部方向や身体の移動などの非言語情報と、場の活性度の相関を実験的に調査している。実験では、初対面と同世代の3人による会話を対象に、情報提示の有無による差も検討している。前田他(2010)は、「場の活性度」を質問紙により参加者が評価する方法を使用している。前田他(2010)の研究では、「場が盛り上がった」かどうか、「会話が盛り上がった」かどうか等について、参加者に5件法での評定を求めた。その結果、場の活性度と、「会話が盛り上がった」で非常に高い相関があり、場の活性度には会話の盛り上がりが高く影響することが明らかにされた。また、「他者と新しい知識が共有できた」、ジェスチャ回数、手の加速度の大きさ、発話時間、クロストーク、2人でのクロストーク、発話交代回数で中程度の相関、頭部回転回数や発話量の偏り、3人でのクロストークで低い相関があり、情報提示の有無がそれらの関係に影響することが示されている。

以上の研究では、三者間コミュニケーションの円滑さの指標として、「会話満足度」と「場の活性度」が使用されていた。「会話満足度」の高さに影響していたのは、非言語表出性が高いという参加者の特性、全体でのうなずきの多さ、討論より雑談といった会話の特徴であった。「場の活性度」に関係するものは、会話の盛り上がり、場の盛り上がりと共に、発話時間の長さや情報提示の有無であった。

また、大塚（2011）は、会話参加者が2人の会話では、1人が話し手になるともう1人が自動的に聞き手になるが会話参加者が3人以上になると多様な言語行為がうまれると考え、初対面の男性3人による会話におけるあいづちの出現をラポールの構築という観点から考察している。その結果、フォローアップ・インタビューからラポールが構築できたと考えられる会話では、1人の会話参加者が聞き手になり、頻繁にあいづちをうっていたが、ラポールが構築されなかったと考えられる会話では、1人の会話参加者が全くあいづちをうたず、残りの2人の会話参加者もあまりあいづちをうっていないことが明らかになった。三者間の会話の場合、あいづちがコミュニケーションの成立に重要な役割を果たしていたといえる。

2-4. 会話のみのコミュニケーションと行為を伴うコミュニケーションとの比較

三者間のコミュニケーションを検討するために行われている研究の多くは、会話場面での相互作用を分析している。大人の場合、雑談など会話だけを主としたコミュニケーションを行うこともあるが、日常場面では、何らかの行動もしくは作業を行いながらの会話することも少なくないと考えられる。会話のみの場合と、一緒に何らかの行為を行う場合で、コミュニケーションのあり方に差がみられる可能性がある。

大武・大塚・井上（2010）は、三者間コミュニケーションにおける食事に有無の影響について検討している。同一環境で食事をしながらのコミュニケーションと、食事が無い時のコミュニケーションを比較分析した結果、食事中は摂食行動を行うために、食事なし場面では見られない長い沈黙が発生することや、食事中は共に食事をしている3人の単位時間あたりの発話回数が均等になることが明らかにされた。大武ら（2010）の研究は、食事の社会的機能に着目したものであるが、食事という共同行為場面でのコミュニケーションと、会話のみのコミュニケーションとの比較という視点からもとらえられる。大武他（2010）の結果では、食事なしのコミュニケーションつまり会話のみの場面では、人は沈黙が生じた（生じそうな）ときにそれを排除するような行動をとり、一番よく発話した人は会話の主導権をにぎっている様子がみられた。一方で、食事場面では、食事が存在することにより、沈黙を排除

する必要がなくなり、各メンバーが均等に発話していたことが示された。つまり、会話のみのコミュニケーションでは、参加者が会話を途切れさせてはいけないというプレッシャーを感じる傾向にあるが、別の行為を伴う場合にはそのようなプレッシャーが軽減されると考えられる。

徳永・武川・木村・寺井（2011）も、3人の共食会話と通常会話との発話行為の比較を行っている。その結果、共食会話では通常会話に比べ、新たな話題の「提供」や情報の「追加」が少ないこと、実質的な発話の間には「応答」が挟まれることが明らかになった。さらに、通常会話では共食会話に比べ、話者、聞き手共に互いを見ることが多く、会話者間で発話を遷移することが多かったが、共食会話では、食べ物を見るために会話の相手から視線がそれ、会話をするための視線の機能が減少することが明らかにされた。共食は会話への参加が緩い場になっていることが示された。

また、西本・宮本・阪田（2011）は、三者間の共同創作活動におけるコミュニケーションを言語・非言語の両面から定量的に検討している。非言語行動に関する結果として、作業者が別の作業者に視線を向けた回数について、通常会話に比べて創作活動場面では、視線先は他の作業者ではなくブロックを組み立てる手元に向けられていくことが多く、視線による次話者選択が行われることがまれであることが示されていた。つまり、通常会話場面でコミュニケーションの指標とされる視線行動が作業を伴う会話場面では指標として適さない可能性が考えられる。

以上の研究より、会話のみでなく行為を伴うコミュニケーション場面では、会話に対するプレッシャーも少なく、沈黙が多くなり、発話者の偏りが減り、お互いに視線を向けることが少なくなり、行為の対象に視線が向くことが多いと考えられる。そのため、コミュニケーションの指標となる行為も両場面で異なる可能性があるといえるだろう。

3. 協同課題場面における女子大学生の三者間コミュニケーションに関する探索的実験

3-1 方法

実験参加者 女子大学生 15名（平均年齢 20歳；レンジ 18歳～22歳）

実験材料 デュプロうちセット ボックス付き（日常の家庭生活を再現できるセットで、様々な家具や掃除機や電話、車や車庫、庭のブランコや三輪車などを含む、ブロック総数 184 個のセット）。

使用機材 デジタルハイビジョンビデオカメラ 3 台。三脚 3 台。IC レコーダー 3 台。小型マイク 3 台。

実験時期 2013 年 7 月下旬～8 月上旬

実験場所 実験室に、楕円の 4 分の 1 の形のテーブル 1 台と椅子 3 脚を設置した。実験参加者が着席したときのお互いの距離が等しくなるように椅子を配置した。机の周辺の 3 か所に三脚を設置し、ビデオカメラを用いて実験参加者の様子を記録した。

手続き 心理学関連の授業終了時に、女子大学生に、「大学生の 3 人組での協同課題」実験への参加依頼書を配布し、友達同士 3 人 1 組で実験に参加可能な参加者を募った。その結果、21 名が友達同士 3 人 1 組で実験に参加した。実験室に入室すると、実験者は実験参加者に 3 つの椅子のうち、好きな席を選んで着席するように求めた。次に、実験者は実験参加者に、幼児データとの比較のため、3 人 1 組で一緒にブロックで家を作るように教示し、30 分経つと実験を終了すると告げた。実験者は、その間の様子をビデオカメラと IC レコーダーで記録することについて実験参加者に説明し、承諾を得た。その後、音声を録音するために、参加者は各自 IC レコーダーに接続された小型マイクを装着した。課題終了後、一緒に参加した友達との日常場面での行動と、一般的な友達との関わり方についての質問紙に回答を求めた。最後に、実験の記録データの使用について、テープ起こししたものをデータとして分析に使用し、データは統計的な処理を行い、一部発話事例として使用すること、また、学術・教育以外の目的で使用することはないことを改めて説明し、書面にて同意を得た。

データの整理 本研究では、5 グループ（15 名）の実験参加者を対象に、実験開始から 10 分間の発話及び動作のデータを分析した。実験開始後 10 分間の発話を IC レコーダー及びビデオカメラの記録より逐語的に書き起こし、ブロックに関わる動作を書き加えたトランスクリプトを作成した。本研究では、話者が交代した時点を発話の終了とみなし、話者交代までの一人の話者のスピーチを発話と定義した。

分析方法 各グループのコミュニケーションの特徴を

とらえるため、グループ毎の発話数、「質問」の発話数と「質問」に対する「返答」発話数、三者間で共有された笑いの頻度をカウントした。これらは、大学生同士の三者間会話場面を検討した研究（大坊・磯・木村, 2005）で用いられた視線行動、うなずき、笑顔、発話量という行動指標を参考に、会話のみの場面ではなく協同課題場面でのコミュニケーションの指標に適していると考えられるものとして選定した。

発話数は、グループ内での言語的コミュニケーションの活性化の程度を示すものと考えられる。

笑いは、基本的に「快」や「喜び」の感情に対応する表情であり、その場面での楽しさを示すものだと考えられる。本研究では、その中でも三者間で共有される明確に笑いと判断できる音声を伴った笑いを分析対象とする。

3-2 結果と考察

(1) グループ内の参加者同士の関係

実験後の質問紙で「日頃一緒に行動することが多いか」「日ごろ一緒に話すことが多いか」という質問に対して、自分と相手との関係について「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。その結果、A グループ（参加者 a,b,c）、B グループ（参加者 d,e,f）は 3 名中 2 名が相手と「一緒に行動することが多い」という質問に対して「よくあてはまる」「非常によくあてはまる」と回答しており、1 名が他の 2 名と「一緒に行動することが多い」という質問に対して「あまりあてはまらない」と回答していた。C グループ（参加者 g,h,i）、D グループ（参加者 j,k,l）、E グループ（参加者 m,n,o）では、3 名共お互いに「一緒に行動することが多いか」について「よくあてはまる」もしくは「非常によくあてはまる」と回答していた。以上の結果より、A グループと B グループを二者関係確立グループ、C グループと D グループと E グループを三者関係確立グループと分類した。

(2) 発話数 各グループ（A～E グループ）において 10 分間に発せられた発話数をカウントした。その結果、5 グループの各発話数は A グループ 301 発話、B グループ 223 発話、C グループ 254 発話、D グループ 154 発話、E グループ 226 発話で、グループ平均 232 発話であった。各参加者の発話数とグループ内での発話率を Table1 に示す。

グループ内での各実験参加者の発話率に差がないかを検討するため、「3名の発話数は同じである」との帰無仮説を立て、 χ^2 検定を行った。js-STARversion 2.9.9j β 版を使用し、 χ^2 検定を行った。その結果、Bグループ以外の4グループでは、グループ内の3名の発話比率に有意な偏りは見られなかった。Bグループでは、3名の発話率に有意な偏りがみられ ($\chi^2(2) = 6.43, p < .05$)、ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、グループ内で1番発話数が多かった参加者dと1番発話数が少なかった参加者fの間で、5%水準で発話率に有意な偏りが見られた。Bグループで1番発話数が少なかった参加者は、日常他の2名の参加者と一緒に行動することが多くないと回答した参加者であった。

各参加者の発話数と、参加者同士が一緒に行動する程度について、Figure1 に示す。

(3) 発話の種類

Schegloff & Sacks (1995) は、隣接対偶という発話連鎖が会話の中で多方面にわたって作用しているこ

とを指摘し、その発話連鎖は、1) 2つの発話からなり、2) この構成成分として2つの発話は隣接した位置に置かれ、3) 各々の発話をそれぞれ別々の話し手が生成する、といった特徴を本来的にそなえていることを指摘した。山田 (1993) は、隣接対として「質問／返答」とのような第一ペア [質問] と第二ペア [返答] の2つの発話順番から成り、第二ペアには第一ペアと同じ発話行為タイプのもので「優先的」にくることを指摘している。また、第一ペアに対して非優先的な第二ペアがくるときには、2つの部分からなるペアだけでは完結せず、リピートなどによって複雑な会話組織が展開するとした。

本研究では、隣接対偶の1つである「質問-返答」に焦点を当て、各グループ内で第一部分「質問」の発話と第二部分「返答」の発話について検討する。

本研究では、相手の応答を引き出す可能性のある語尾が上がった発話を「質問」発話と分類した。通常の会話場面では、「質問」発話の後には「返答」発話が生じると考えられる。また、二者間での場面では、「質問」発話は「返答」する相手を想定した宛先のある発

Table1 各参加者の発話数とグループ内の合計発話数に占める割合

グループ	参加者 1	参加者 2	参加者 3	合計
A	a 108 発話 (36%)	b 103 発話 (34%)	c 90 発話 (30%)	301 発話
B	d 90 発話 (40%)	e 77 発話 (35%)	f 56 発話 (25%)	223 発話
C	g 102 発話 (40%)	h 78 発話 (31%)	i 74 発話 (29%)	254 発話
D	j 57 発話 (37%)	k 52 発話 (34%)	l 45 発話 (29%)	154 発話
E	m 81 発話 (36%)	n 79 発話 (35%)	o 66 発話 (29%)	226 発話

注. 上段の参加者 1、2、3 はそれぞれグループ内での発話数が 1 番目、2 番目、3 番目の参加者に対応する。表中のアルファベット及び数字は、左から順に、グループ、参加者、発話数、グループ合計発話数に占める各参加者の発話の割合を示す。

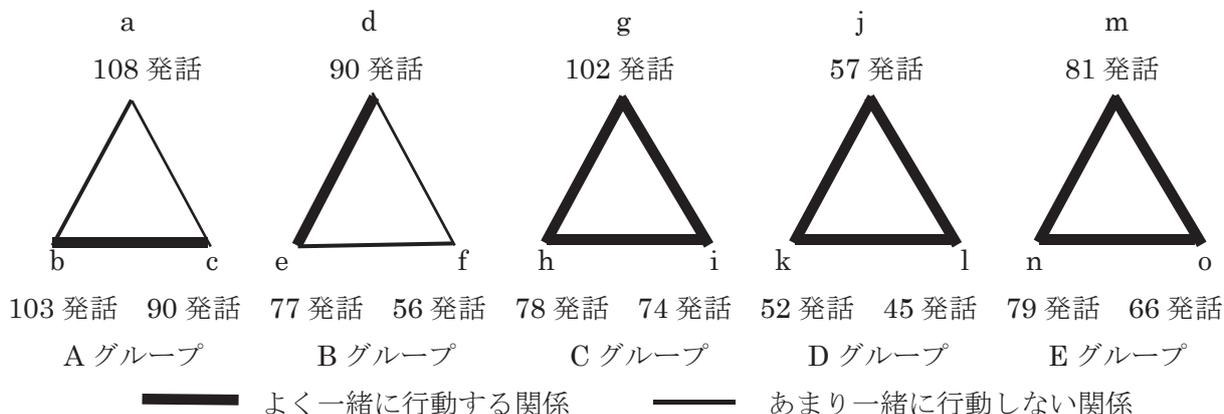


Figure1 参加者間の日常の関わりの程度と各参加者の発話数

話だといえる。しかし、三者による協同課題場面では、疑問形の発話であっても自問自答のように必ずしも相手の応答を求めているとは限らず、また「返答」する相手も想定されているとは限らない。そこで、「質問」発話すべてについて、発話者とその発話に対する「返答」者を特定した。

「質問」に対して他の2名により「返答」がされた割合は、Aグループでは90%（「質問」62発話に対して「返答」56発話）、Bグループ89%（「質問」53発話に対して「返答」47発話）、Cグループでは89%（「質問」39発話に対して「返答」44発話）、Dグループ88%（「質問」25発話に対して「返答」22発話）、Eグループ94%（「質問」52発話に対して「返答」49発話）であった。5グループすべてにおいて、発せられた9割以上の「質問」に「返答」が行われ、隣接ペアが形成されたことが明らかになった。

さらに、グループ毎に各参加者が「質問」の発話を行った割合と、他の参加者の「質問」に対して「返答」の発話を行った割合とを算出した。

「質問」発話者は、Aグループの参加者 a 31%、b 63%、c 6%、Bグループの各参加者 d 43%、e 38%、f 19%、Cグループの参加者 g 68%、h 14%、i 18%、Dグループの参加者 j 40%、k 32%、l 28%、Eグループの参加者 m 42%、n 37%、o 21%であった。Aグループ・Cグループでは「質問」の発話者の半数以上が、1名の参加者により行われていた。

「返答」発話者は、Aグループの各参加者 a 50%、b 18%、c 32%、Bグループの各参加者 d 43%、e 21%、f 36%、Cグループの参加者 g 26%、h 15%、i 59%、Dグループの参加者 j 23%、k 64%、l 14%、Eグループの参加者 m 20%、n 45%、o 35%であった。Aグループ

・Cグループ・Dグループでは「返答」の発話者の半数以上が、1名の参加者により行われていた。

Aグループで「返答」発話が多かった参加者 a は、グループ内で、他の2名と一緒に行動することが少ないと回答した参加者であった。Aグループは二者関係確立グループであったが、一緒に行動することが多い b と c の発話数よりも a の発話数が多く、「質問」を多く行っていた参加者 b に対して優先的に「返答」者の立場をとることにより、三者間コミュニケーションのバランスを保っていたと考えられる。

Figure2に、各参加者の質問に対する返答数を示す。

「質問」の内容は、ブロックの使用方法や配置に関するものであった。以下に、「質問」発話の事例を挙げる。

事例の表記方法：事例の小文字のアルファベットは発話者を示す。

< > は行為を示す。

[] は同時発話を示す。

下線部は該当箇所を示す。

u>

- 事例1：ブロックの使い方に関する質問（Aグループ）
- b 階段あるで <ブロックの階段パーツを手にする>
 - a はまらない <ブロックの壁をはめようとするとうまくはまらない>
 - c <bの階段パーツを見て>でた、はしご <ブロックの壁をはめようとする>
 - a すごい。<ブロックの壁が土台にうまくはまらずこれ置いただけ？>
 - c <ブロックの壁を土台にはめ> あっ、はまったよ。

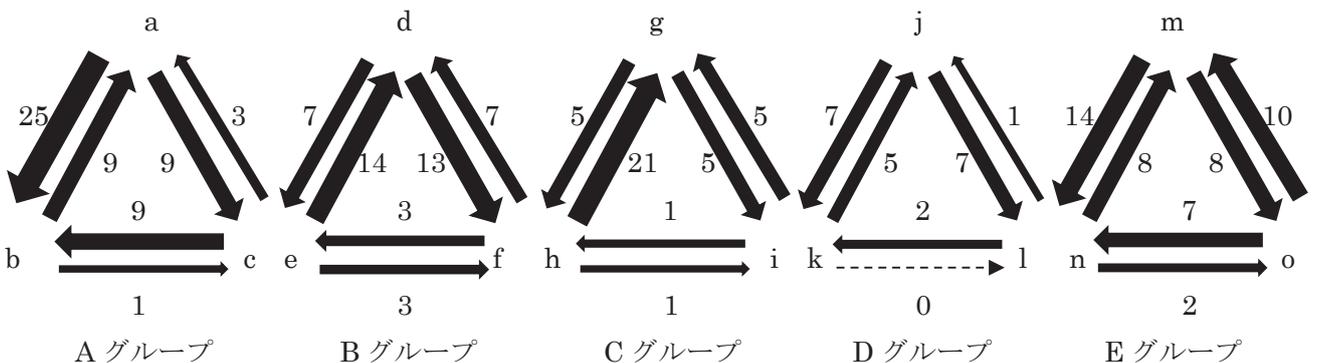


Figure2 「質問」発話者に対する各参加者の「返答」発話数

角度による

事例2: ブロックの配置についての質問 (Cグループ)

g 玄関につけた方がいい、これ? 〈正面の塀の上の屋根を触りながら h を見る〉

h いや、そっちでもいいんちゃう 〈g の触っていた屋根を指さす〉

g じゃあ、こここうする、これみたいに 〈右側の塀を触った後、左側の屋根を触る〉。

これ何? 〈i の前にあった透明のブロックを手を取る〉

h いや、わからん 〈首を横に振る〉

i まあ、それはおいおい。

事例1では、全員が自分が取ったブロックを土台にはめようとするが、うまくはまらず、自分の持っているブロックを見ながら a が質問をし、それに対して c も自分のブロックを見ながら返答していた。

事例2では、屋根型のブロックの配置について、g が h の顔を見て質問し、h は g が作っているところを指さしながら返答していた。

本実験では、ブロックの家づくりが課題であった。子ども用の玩具でありながら、外国風の家具や人形など一見ただけでは用途がわからないパーツが多く、また屋根や壁の組み合わせ方により多彩な家を作ることができるため、必然的に、参加者同士でブロックについて質問しあうことが多くなったと考えられる。このような質問に返答するのに、特に親しさの程度は関係しないため、返答の可能性は他の2人に等しく与えられていたといえる。

(4) 笑いの頻度と内容

3人組での協同課題場面でのコミュニケーションをどれだけ楽しんでいったかという指標として、10分間のブロック遊びで生じた笑いについて検討した。本研究では、三者間での円滑なコミュニケーションが行われていた指標として、一者のみの笑い、二者間の笑いではなく、三者そろっての笑いの回数をカウントした。その結果、Aグループでは7回、Bグループでは4回、Cグループでは3回、Dグループでは6回、Eグループでは8回、三者そろっての笑いが生じていた。

笑いの内容により、課題遂行に関する笑い、課題

遂行とは関係しないものに分類した。

その結果、28回中、課題遂行に関する笑い(事例3、4)が24回で、課題遂行に直接関わらない笑い(事例5)は4回のみであった。

事例3 意外なブロックの配置に対する笑い(Aグループ)

〈a がブロックの階段の上があったところに柱を置こうとする〉

b ちょっとそんなとこやったら、ここ入れへんよ。

〈a が手に持っていた柱を階段の上に置くのをやめる〉

〈c が壁のない2階の床の上の端の方に人形を寝かせる〉

b やばい、死ぬ死ぬ死ぬ。これ、なんか、これおいときたいな 〈ブロックの柵を2階の人形の枕元に置く〉

abc はははははは 〈笑う〉

c かしこい

事例4 物に関する認識が共有されていなかったことに対する笑い (Bグループ)

f これ何、何これ? 〈収納用のひきだしのはいつていない柱を手取る〉

d え? 〈f が手に取っている柱に手をかけてみた後、自分の横にある別の柱を手取る〉

e 〈fd が手に取っているブロックとは違うブロックを見ながら〉ひきだしぬけてるんちゃう、それ。

d 〈手に持ってる柱を見ながら〉ああ、これひきだした。

e 〈f の方を向いて〉いつてるやん、さっきから。

def はははははははは 〈笑う〉

事例5 課題遂行中に CM ソングを歌いだしたことに對する笑い (Aグループ)

a 〈庭の上にブロックを置きながら〉日のあたる窓が見える

c 広がる [世界に] 〈ブロックをしながら、歌いだす〉

b [世界に] 〈ブロックをしながら、歌いだす〉

c 夢があふれる。家族を思えば [頑張れるはずさ] 〈ブロックをしながら歌う〉

b [頑張れるはずさ] このまちでくらそう 〈ブロックをしながら歌う〉

- abc [ははははは][ふふふふふ]〈ブロックをしつつ、
笑う〉
b みんなすむまちで〈ブロックをしながら続けて歌
う〉
a めっちゃテレビみてるやん〈ブロックをしながら〉

事例3は、参加者の1人が、壁も何もない2階の床の端に人形を寝かせたのに対して、人形が落ちてしまうことを不安に感じたもう1人の参加者がとっさに2階の床の端の人形の枕元に（庭用の）柵を置くという行為を取ったことに対して、予想外の展開に3名そろって笑ったという事例である。事例4は、参加者fが発した質問に対して、dは返答できなかったが、fは正しく返答し、それを受けてdも納得し、dとfの間では共通の認識が出来上がっており、当然dも理解していると思っていたのに、共有されていなかったということについての笑いであった。事例5は、課題遂行中に発したaの言葉がきっかけとなりcがCMソングを歌いだし、それにbが共鳴して続けて歌い出したことに対する笑いである。

本実験では、協同課題がブロックという可視的なものであったため、会話内容についてよりも課題や課題遂行に関わる笑いが生じやすかったものと考えられる。

4. まとめ

本研究では、初対面ではなく、すでに対人関係が確立されている友達同士の三者間コミュニケーションを分析することにより、スムーズな三者間コミュニケーションを築く上で重要な要因について検討することを目的としていた。二者関係と異なり、三者関係には3組の二者関係が含まれることもあり、非常に複雑なダイナミズムがあることは藤澤（1997）、大坊（2004）の指摘している通りである。そこで、本研究では仲の良い3人組を対象に実験を行ったが、実験後の質問紙の結果、実験参加者グループには、二者が特に親しい二者関係確立グループと、三者全員が親しい三者関係確立グループとが混在していたため、参加者間の親しさの程度も考慮して、各グループの三者間コミュニケーションについて検討した。その結果、三者関係確立3グループでは、各参加者の発話数に有意な偏りがみ

られず、比較的均等に発話を行っていたことが明らかになった。

大武他（2010）の研究で、食事をともなう場面では、会話のみの場面と比べて、3人の単位時間当たりの発話回数が均等になるという結果が示されており、本研究でも行為を伴う会話であったため、発話回数が均等化した可能性が考えられる。

一方で二者関係確立2グループでは、1つのグループでは発話数に差が見られなかったものの、もう1つのグループでは、日頃一緒に行動することが少ない参加者の発話が、日頃一緒に行動することが多い参加者の1人の発話に比べて有意に少ないことが示された。発話数に差が見られなかったもう1つの二者関係確立グループにおいては、日頃一緒に行動することが少ない参加者が、他の参加者の「質問」に対して、「返答」発話を最も多く行っていた。大塚（2011）は、初対面同士の三者間会話において、1人の会話参加者が聞き手になり頻繁にあいづちをうっていた会話ではラポールが構築されたことを報告している。本実験では、ブロックで家を作るという課題遂行のため、参加者はほぼ下を向いたままのことが多く、うなずきはあまり生じていなかったが、相手の「質問」に「返答」することが、聞き手になりあいづちをうつことに共通する応答性を示すことになり、その結果、三者間コミュニケーションのバランスがうまく維持されたと考えられる。

本研究ではブロックの家づくりという協同課題遂行場面を設定した。この課題設定は、大武他（2010）・徳永他（2011）が検討した食事場面とは異なり、協同性が求められる課題である。食事場面は会話場面に比べて、会話に参加しなければならないという強制感が弱いことが大武他（2010）・徳永他（2011）により指摘されており、視線行動も会話場面に比べて他者より行為対象（食事）に向けられることが多いことも示されている。ブロックの家づくり課題では、食事場面に比べて、他者より行為対象に注意を向けることがより多くなり、会話を行わねばならないという意識も弱くなると考えられる。一方で、3人で1つの物を作りあげるといった協同性が求められたため、課題遂行に関わる会話は必要となる。本研究で3人により共有された笑いの大半は課題に関わるものであったこと、質問もブロックの用途や配置に関するものが多くみられたことなどを考慮すると、本研究のブロックの家づくりとい

う実験課題場面は、参加者間の協同性が要求され、ブロックという可視的な物を媒介とするため場の理解も容易であり、非常に三者間コミュニケーションが成立しやすい場面であるといえるだろう。このような条件をそろえた協同課題場面を設定することにより、子ども達の三者間コミュニケーションの力の発達の一助となる可能性が考えられる。

本研究では、実験参加者数が少ないことや、発話の種類等を実験者1名で行っていることなど不十分な点も多い。今後、実験参加者数を増やし、視線行動なども含めたより詳細な分析を行っていく必要がある。

引用文献

- 大坊郁夫 (2004). 親密な関係を映す対人コミュニケーション, 対人社会心理学研究, 4, 1-10.
- 大坊郁夫・磯友輝子・木村昌紀 (2005). 3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割. 大坊郁夫(編著). 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション. (pp.31-86). 京都: ナカニシヤ出版
- 藤澤 等 (1997). ソシオン理論のコア. 京都: 北大路書房
- 前田貴司・高嶋和毅・梶村康祐・山口徳郎・北村喜文・岸野文郎・前田奈穂・大坊郁夫・林 良彦 (2010). 3人会話における非言語情報と「場の活性化」に関する検討, 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 109 (457), 73-78,
- 村山 綾・清水裕士・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (2) ——3人会話集団における会話満足度に影響を及ぼす要因——, 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2006-24, 7-12.
- 西本裕輝 (2004). 女の子の友達関係の危うさ. 児童心理, 58 (16), 1491-1499. 東京: 金子書房
- 西本光志・宮本圭太・阪田真己子 (2011). 三者間の共同創作活動におけるコミュニケーション: 作品の創作性への影響. 2011年度日本認知科学会第28回大会発表論文集, 324-327
- 小野哲雄・坂本大介・小川浩平・駒込大輔 (2008). 関係性に基づく新たなインタラクションへ向けて. 情報処理学会研究報告知能と複雑系 (ICS), 1-7.
- 大武美香・大塚雄一郎・井上智雄 (2010). 3者間コミュニケーションにおける食事の有無の影響, 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 109 (457), 67-72.
- 大塚容子 (2011). 初対面の3人会話におけるあいづち: ラポール構築の観点から. 岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編, 50, 85-95.
- Schegloff, E., & Sacks, H. (1972). Opening up closings, *Semiotica*, 7, 289-327.
- (シュゲロフ E・サックス H. 北澤 裕・西阪仰 (訳) (1995). 会話はどのように終了されるのか. 日常性の解剖学 (pp.175-241) 東京: マルジュ社)
- 徳永弘子・湯浅将英・武川直樹 (2006). 3人会話における発話交替時の視線行動分析: 聞き手の立場から見た発話・非発話の戦略, 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2006-45, 23-28.
- 徳永弘子・武川直樹・木村 敦・寺井 仁 (2011). 3人の共食会話における発話行為の構造分析: 視線方向と発話行為タグによる共食効果の評価. 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2010-68, 55-60.
- 礪波朋子 (2007). 4歳児の粘土粘度遊び場面における三者間コミュニケーションの検討, 上越教育大学研究紀要, 26, 317-330.
- 山田富秋 (1993). 「おせじ」のプロトコル分析——エスノメソドロロジーからのアプローチ——. 海保博之・原田悦子 (編) プロトコル分析入門. (pp.202-220) 東京: 新曜社.

謝辞

実験にご協力いただきました大学生の皆様にご心より感謝致します。

